

第136回 経済科学研究所研究会

「ロシアの体制移行の進捗状況」

—投資不足の転換の可能性について—

社団法人ロシア東欧貿易会
ロシア東欧経済研究所研究開発部次長 高 橋 浩

日本大学経済学部経済科学研究所

2002年10月23日

ご紹介いただきました高橋でございます。

私は大学の先生ではありません。社団法人ロシア東欧貿易会の中にありますロシア東欧経済研究所の研究員です。ロシア東欧貿易会というのは、東芝であるとかシャープであるとか、三井物産であるとか三菱商事であるとか、さまざまなメーカーや商社、あるいは北海道庁とか新潟県などの地方自治体その他、ロシア・東欧と貿易・投資関係、経済関係に関心を持つ、その発展を願っている組織で構成される会であります。私自身、日ごろの業務の中で、日本とロシア・東欧との貿易、経済関係というのを常に考えておりますので、私の関心もそのあたりから生まれてくる。いかに新しいロシアと日本の企業との経済関係が発展するか、ロシア自身の経済も発展をして日本のビジネスチャンスも生まれるようになるのか、そのような関心を常に持っているということがあります。

1991年にソ連が解体いたしましたして、1992年からロシアが誕生いたしました。それと同時に、中央集権的な社会主義の体制から市場経済体制に1992年以降完全に移行して、ほぼ10年が経っているわけです。その間の経過をこの短時間でお話するのは非常に難しく、紆余曲折もありますので、手短にお話ししますけれども、一言で言いますと、体制移行からしばらくはかなり厳しい状況があった。現在は成長率もかなり高くなってきて、その厳しい状況に比べますとかなりよくなってきていますけれども、体制が移行した後の経済混乱という状況は基本的にはまだそんなに変わりはないと私自身は思っております。

1 ロシアの固定資本投資不足

特に、今回の私の報告のサブタイトルの中に「投資不足の転換の可能性について」と書いておりますけれども、ロシア経済の困難な状況がほぼ10年以上続いている基本的な問題点の1つの原因に、投資が非常に不足しているということがあります。1991年にソ連が解体して、1990年を100として固定資本投資は1992年には51ですから、ほぼ半分になっている。それから毎年

前年を下回り続けまして、1998年までずっと下がり続けております。

固定資本投資の大幅な減少というのは経済にとってはものすごく大きなダメージで、企業の設備とか機械はどんどん老朽化が進みまして、経済に非常に悪影響が出てくるわけです。この激減の要因が何なのか、実はそれ自身大変な問題で、それにはさまざまな要因があるということにも注目すべきなのですが、ここではそれについてあまり深くは説明いたしません。ただ、ここで1つだけ注目しておきたいのは、単純に資本の投資が激減したという事実以上に、ロシアの産業構造がこの間、非常に変わっているということです。

2 ソ連からロシアへの産業構造の変化

ソ連時代の経済構造の中でどういった経済部門が大きな部分を占めていたのかと申しますと、一言で言えば、それは軍需部門、兵器生産部門であります。ご承知のように、当時はアメリカとソ連との厳しい冷戦という状況の中に置かれていましたので、軍需部門の強化に迫られて、核兵器も配備し、原子力潜水艦もつくっていた。その関連の割合がどの程度であったか明らかにはされていませんけれども、先端的な軍需機器に莫大な投資を行いまして、兵器生産を維持し続けてきたわけです。

1990年代に入って、米ソの対立、アメリカとソ連の冷戦というのがなくなってきたことを背景にして、ソ連は軍需生産を少なくしてきた。そしてロシアになりまして、もちろんロシアになったからといって兵器産業が必要でなくなったわけではありませんけれども、経済的にも体制移行の困難な中で軍需生産を人工的に維持していくのは困難であったわけで、兵器産業部門の縮小はさらに進みます。その分もこの固定資本投資の激減という中に当然含まれている。ですから、1990年を100として、1992年には51、以降毎年どんどん下がっているというのは、通常から言えば、とんでもない経済の落ち込みだということになりますけれども、それだけではなくて、兵器産業の縮小がある。そうい

うことも考慮して理解すべきであると思います。

もう1つ、兵器部門の維持と若干関連していると思いますが、ロシアというのは世界一大きな国です。ソ連時代はもっと広大な、中央アジア、ウクライナ等も含めて、世界一の面積を誇った国でありますけれども、米ソの冷戦の中で、軍需産業を維持するだけではなくて、国境というものを重視する観点から、辺境地域にもかなりの投資を行ってきた。ソ連の中で、西の欧州地域はもともと人口が集中的に住んでおりましたけれども、ハバロフスクとか沿海州とかサハリンといった日本に近い極東、それからシベリア、北極圏に近い地域、そういったロシアのいうなれば国境地帯というの、ある程度国として意図的に人口を維持する政策をとらなければいけなかった。極東であるとか極北の地域に発電施設とか鉄道施設、その他もろもろの経済インフラを人工的に創設して、賃金の奨励策をとって、そこに移住してもらう。もちろん強制的な移住ではありませんけれども、経済的な刺激策をとって移住を進める。それと同時に、単純にインフラがあるだけではだめですから、経済的観点から言えばやや疑問なところに巨大企業を配置する。そこで雇用することによって人口を維持するという体制をつくってきた。

そういったソ連時代の米ソの冷戦の中で生まれてきたさまざまな経済構造、そしてそれを可能にする中央集権的な社会主義経済によってそれらの構造が維持されてきたわけですが、米ソの冷戦がなくなって、中央で指令をして経済を運営する中央集権的な社会主義体制がなくなった。そこで必然的に軍需産業が小さくなり、人工的に支えてきた辺境地域への投資も下がってきた。そういった要素がこの固定資本投資の激減というのになかなか加味されている。ですから、これを単純に体制が移行して経済混乱が生じたからこれだけ激減したという、それだけの見方というのは、私は間違っているのではないかと思います。

3 資本投資の回復時期

本来の話に戻りまして、このほぼ10年間ずっと固定資本の投資が下がってきたということですが、最近の傾向を見ますと、1998年を底にして、1999年、2000年とレベルは高くなっておりまして、固定資本投資の減少傾向というトレンドは1998年から変わりました。1999年から増加傾向に移ったと言えるわけです。GDPは1997年からプラスに転じておりまして、1997年のGDPが0.9%増。工業部門生産の伸び率も、非鉄金属が6%増、機械工業、化学・石油化学はともに4%伸びています。こういったかたちで、ロシアの産業は1996年～97年ぐらいからトレンドとしては回復傾向にあったという見方があるわけです。ところが、1997年の資本投資は依然として、ほんのわずかですが、マイナスになっている。もちろん資本投資が少なくなっている中で工業生産が伸びるような状況というのは考えられないことではないと思うのですが、私は疑問に思っていたわけです。

一部のロシアの専門家の中には、実は1996年～97年ぐらいから資本投資はかなり増えてきていたという指摘をしている人がいます。たとえばKosals氏もその1人で、単純に言いますと、「闇の経済」がかなりあるということです。「闇経済」というのはロシア経済の中でよく言われることでありまして、これがGDPの2割だとか4割だとか、いろんな数値があります。その関連で、統計が実態を表していないのではないかと、いうことです。

この「闇の経済」というのはかなり複雑なシステムなのではないかと思います。もちろん単純なケースもありますけれども、たとえば会社をたくさんつくって、その中で資金やモノのやりとりを複雑にして、いろいろローンを組んだりするとか、そういった複雑なシステムをとっている。これは闇ではないですけども、私もロシアに行きまして税金逃れの手口を聞かされたことがあります、幾ら聞いてもわからない。私のロシア語の聞き取りの問題ではなくて、容易にわからない、その当人にしかわからないようなシステム

をつくり上げているケースが非常に多いという印象があります。

とにかく闇のさまざまなシステムが発達していて、闇も含めた実体経済では1996年～97年ぐらいからすでに回復基調に入っていた。モスクワなど、ロシアの一部の地域ではすでにその前から経済発展が相当進んでいたわけですが、ロシア全体として見ても、1996年～97年ぐらいからトレンドとしては回復傾向にあった。しかし、統計にはその闇の部分が含まれていないために、さまざまな数字の齟齬が出てくるのかな、というのが私の考えです。

4 設備老朽化の問題とソ連末期の産業政策

いずれにしても、固定資本の投資が激減しているということになりますと、経済に対する悪影響が出てくるわけです。まずは、老朽化です。投資を抑えていたわけですから、一旦入れた機械、設備をそのまま更新せずに使っているという状態が蔓延していた。その結果、1995年以降、老朽化した設備の割合がどんどん増えておりますが、投資が1999年、2000年と増えてきたことを反映して、それに呼応するように、2000年で工業部門は若干改善していますし、商業と外食部門も改善しています。ただ、農業部門の老朽化は依然として続いておりまして、1995年は30数%だったのが、2000年には50%を超えるという、すさまじい老朽化が進んでいることがわかります。

これについて、私はやや気になることがあります。何が気になるかといいますと、ソ連時代の末期、ゴルバチョフ政権の時代に、一部部門について相当の設備更新を行ったわけです。1つは機械工業の更新です。ゴルバチョフ政権の初期に、機械工業を改善することによって、それが波及的にソ連経済全体を押し上げるという政策のもとに、工作機械部門等の産業機械部門に相当な投資をやっています。もう1つは、ゴルバチョフ政権の末期に進められた消費財部門の設備増強です。当時、消費財のモノ不足が最も大きな課題でありましたので、食品工業をはじめ、消費財部門の軽工

業について、国内の設備増強とともに、海外からの輸入もかなり進めた。その傾向はおそらく1990年、91年、92年ぐらいまで続いたと私は理解していますけれども、その影響がいつ出てくるのかということです。

毎年継続的に平均的な固定資本投資があつて、設備更新の偏りがなければ問題はないのですけれども、ゴルバチョフ時代の初期と末期の2回、設備更新について独特な政策を進めたということがありますので、それが固定資本の老朽化とか設備更新の時期等についていびつな影響を与える可能性がある。あるいはもうすでに与えているのかもしれませんが。ソ連時代末期の2回の政策がどういったかたちで固定資本動向に反映しているのか、その影響がいつ出てくるのか、これは隠された私のテーマの1つであります。

5 資本投資不足と資本逃避

本題に戻りまして、統計上は資本投資がどんどん激減しているということですが、それではロシアの国内に資本があるのか、資金がないのかということですが、実はロシアの貯蓄率は結構高くて、日本とそんなに変わらないレベルであるという指摘が北海道大学の田畑先生の研究によってなされております。その背景は、ロシアには石油、ガスを中心として膨大なエネルギー資源がありまして、世界でも1～2位を争うレベルで海外に輸出をしている。当然ロシアの石油及びガス関係の企業は膨大な外貨も有しておりまして、ロシアに資金はそれなりにあるということです。

ロシアにはそれなりの資金力があるのに、固定資本がこれだけ激減しているのはなぜか。これを単純に市場経済への移行の混乱というものだけで説明しているのかという問題ですが、これについてよく言われるのは、ロシアでは資本逃避が盛んで、得られた資本・資金がロシアの国内には使われないで海外に流れていってしまうという議論です。

資本逃避というのは何であるか、最近はかなりきちっとした議論が行われるようになってきましたけれども、数年前まではかなり粗い議論があったような気

がします。資本逃避として、毎月10億ドルぐらい、年間だと100億ドル以上流出していて、それがロシアの国内に帰ってこないのが問題である、そういったわりあいざっくりとした話が多かったわけです。しかし、資本逃避しても、それがまた帰ってくればいいわけですね。逃げていっておしまいというのではなくて、マネーロンダリングを通じて海外から正しいおカネとして入ってくるとか、何らかのかたちで資本還流する部分が当然あるはずで。ですから、逃げていった分と入ってきた分と差し引きで考えないと資本逃避の問題はわからない。そういうこともあって、この問題は調べれば調べるほど難しい。

また、ロシア国内での外貨のタンス預金を資本逃避と考える人もいます。これは違法な外貨所有なのかどうかわかりませんが、ロシアの国民や企業の持つタンス預金的な外貨が400億ドルとか500億ドルとかある。これを資本逃避と見るかどうか、「資本逃避」の定義がまずあるべきですけれども、ロシアから海外に逃げていく資本の流出以外に、国内の外貨のタンス預金というの大きな問題になっているわけです。

あるいは、ロシアの国際収支統計の中の誤差脱漏が資本逃避の一部であるという見方があります。通常の貿易、輸出・輸入、サービス収支とか資本投資とか、そういったものに入ってこない、あるいは把握されないものとしての脱漏・誤差、それも資本逃避の額と考えるべきだという議論です。最近の傾向を見ますと、1996年と97年が49億ドル、1998年が91億ドル、1999年が70億ドル、2000年が93億ドルとなっている。これはそれぞれマイナスですから、その分だけ勘定として流出しているということで、この誤差脱漏がロシアの資本逃避の一部であるというわけです。

では、どの国でも誤差脱漏が資本逃避、資本流出を示しているのかというと、必ずしもそうではないという議論をする人がロシアの統計専門家にいまして、Kosarevという統計の専門家です。この人がイギリス、フランス、ドイツ、日本、スイス、ブラジル、インド等について当てはめてみたところ、ロシアは確かに誤差脱漏のマイナスがかなり大きくて、しかも定常

的にあるけれども、たとえばブラジルのように資本逃避が観察されると思われる国を見ても、あまり明確な傾向は見られない。プラスになったり、マイナスになったりで、その範囲もあまり大きくない。資本逃避が誤差脱漏に表れるとすると、ブラジルなどは巨額な数字になりそうですけれども、そうでもない。したがって、誤差脱漏を資本逃避そのものと同じに考えることはできない、というのがこの人の結論であります。

誤差脱漏の中身はよくわからないのですけれども、たとえばロシア経済の大きな位置を占めるエネルギー部門の輸出入の際の不正申告がかなり大きいと言われています。ガス、石油の輸出の際の金額の過少申告を通じた違法な資本流出が誤差脱漏になって、結果としてそれが資本逃避になっているのだということです。

6 ロシアの国際収支上の資本逃避

ロシアの資本逃避の方法は、ほかにもありまして、国際収支統計をみると、(1)は供与した貿易信用及び前金です。貿易信用というのは、輸出契約を結んで、モノを出して、相手方にクレジットを与えておカネを貸し付けるわけですけれども、その場合、貸し付けたおカネが結果的に戻ってこない、そういうかたちでの資金の流出です。前金というのは輸入の場合の資本逃避ですけれども、輸入契約を結んで、ロシア側が前金を払う。その後モノが入ってくるはずなのですが、それが入ってこないで、おカネだけが海外の企業に行ってしまうということです。(2)は輸出未収金及び前金輸入の未実施額の累計額の変化というものがあります。これは非常にわかりにくいし、私自身の理解も正しいのかどうかわからないので省略しますが、それと(3)の誤差脱漏と、これらを含めたものが国際収支統計から得られる資本逃避の額となります。

7 資本逃避から資本輸出へー本格的な投資不足解消には時間がかかる

それでは資本逃避が最近はどういう感じになっているのかということです。輸出入の申告を不正にやるとか、にせの輸出入契約をつくって違法な資金流出を図るとか、資本逃避のさまざまな手口についての取り締まりが強まっております。1999年、2000年と国際収支上で得られる資本逃避の額は減ってきており、そういった制度的な取り締まりが反映しているのではないかと考えられます。

ただ、正式な資本輸出入の数字ですが、たとえば2000年の数字を見ましても、資本の海外への流れというのはかなり根強いものがある。確かに違法な流出は少なくなる傾向にあると思いますけれども、海外への直接投資、ポートフォリオ投資その他、違法ではない資本輸出は逆に増える傾向が一部出ているわけです。したがって、違法か正当かは別にして、外に出るおカネの額自体は相変わらず巨額で、資金の流れは傾向的にそんなに大きくは変わっていないというのが私の結論であります。

1999年以降、ロシアの経済は好調で、輸出収入等の資金もかなり入ってくる。石油、ガス、その他の企業も外貨を相当得ておりまして、資金力はできてきている。それが国内投資にも使われるようになって、結果的に1999年以降、固定資本投資が増えているというけれども、それ以上に海外への資金移動が多いというのが最近の状況であります。これはひとえにロシア国内の体制に問題があるのでしょうか。ロシアの経済が少しずつ改善して、発展もしてきているけれども、輸出で得た資本を国内に受け入れるだけの経済状況になっていない。制度的にも、ロシアの国内に巨額の投資をして、それが大きな利益を得て保護されるような環境はまだ完全には整っていない。そこに一番の問題があるのではないかと思います。

ロシアの産業構造自身にも問題があると思います。資金を得るセクターは石油、ガスなどのエネルギー産業とか資源関係の非鉄産業などの巨大産業に集中して

おりまして、そこで得られた資金が金融システムを通じてほかの産業に使用されるような環境はまだできていないということです。ただ興味深い話は、ある意味でロシア的なやり方なのかもしれませんが、ロシアの石油・ガス産業や非鉄産業の会社が農業部門とか一部の製造業の会社を自分のグループに入れまして、そこに資金を提供するというかたちで、資金を獲得する産業から資金を必要とする産業におカネが流れる。これはまだほんの一部にしからずきませんが、そういったことも起きてきております。この企業グループ化がどんどん進んで、資金が農業部門や消費財部門などに行くような流れがさらに強まると、ロシア経済全体がかなり発展するのではないかという期待があります。

それから、ロシアの金融システムがまだなっていないということもよく言われます。私の感じでも、銀行部門の改善の兆しはほとんど見えない。弱小な銀行しかありませんし、一部の銀行は完全に企業の単なる資金部門的なところになっていますし、一般国民の銀行に対する信頼度はまだまだ低い。1998年の金融危機のときの預金封鎖の問題であるとか1992年のソ連解体直後のさまざまな銀行部門の混乱を考えますと、ロシアの銀行部門というのは、小口はそこそこ行くかもしれませんが、巨大な銀行に発展していくというのは難しいのかなと思います。

一方、証券市場はどうかということですが、いまの段階では証券市場の成熟度は非常に低いレベルで、ロシアの企業の株式が一般の市場で流通している部分は極めて少ない。世界の投資ファンドに一部組み入れられているところもありますけれども、圧倒的多数は一部のオーナーであるとか投資ファンドが持っている。RTS（エルテーエス）というロシアの証券市場がありますけれども、取引金額はロシアの産業規模からしても非常に小さい。企業の証券化、株式化は、ある程度されているけれども、実際の市場流通額は圧倒的に少ないというのが現状です。

たとえばユコスというロシアで2番目の石油会社がありますけれども、そのある1日の株式取引はたった

1000株です。このように少数の株の取引ですから、株価の操作も容易にできますし、証券市場が発展していくにはまだまだ障害が多いという感じがいたします。このような資本市場の未成熟さが資本逃避の1つの原因にもなっているわけです。

このようないまのロシアの国内事情から考えて、それでは資本投資不足は今後改善されるのであろうかということですが。結論を先に言いますと、抜本的な改善にはまだ時間がかかりそうだと私は考えております。

確かに、さっき資本逃避と同時に資本流入もあると言いましたけれども、金額を見ますと、最近、キプロスからの直接投資あるいは一般的な投資が増える傾向が出てきています。キプロスというのは地中海にあるトルコの南の国ですけれども、資本逃避先の1つとして有名です。ロシアの資本逃避先として、アメリカ、イギリス、バージン諸島、その他いろいろありますけれども、キプロスにもかなり逃げている。そこから逆に外資というかたちでロシアの国内に入ってきているわけです。一旦ロシアから出て、そこで運用なり投資なり何なりされて、きれいなおカネになって外資というかたちで再びロシアに入ってくる。マネーロンダリ

ング自体は決してよいことではありませんけれども、そういうやり方もあり得るのかな。かなりいびつではありますがありますけれども、それも発展の1つのかたちなのかなと思います。しかしながら、お金が入ってくるといっても、出て行くお金も、まだまだ大きく、この複雑なシステムは、資本逃避が資本輸出に代わるなど若干の形態変化はあっても、構図は維持されている。

一度外へ出たものが、ロシア国内の投資機会ができてまた入ってくるという、複雑なことをするのかといえますと、一部には1999年にできた新しい外国投資法のメリットを利用しているということもあるようです。もちろん法律ができたからといって外国投資が伸びるわけではありませんけれども、私の聞いた限りでは、外国投資法の新しいバージョンは外資に対する保護措置が内資に比べてかなりよくなったということで、逃避していた資金が外資としてロシアの成長産業に投資するというケースもあります。とにかく、資本逃避あるいは資本輸出が根本的に減少して、国内だけで資金循環が発展するには、まだ時間がかかりそうだというのが、私の結論です。